

横浜事件の真相

つくられた
「泊会議」

木村
亨

筑摩書房

木村 亨（きむらとおる）

1915年新宮市に生まれる。1939年早稲田大学文学部社会学科卒業。同年中央公論社入社～43年退社。1946年世界画報社入社～50年退社。1952年～63年ダイヤモンド社囑託。1964年～80年ダイヤモンドグループ主宰。現在、日本百科社代表。

横浜事件の真相□つくられた「泊会議」

一九八二年十二月二十日 初版第一刷発行

著者 木村 亨

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
電話東京二九一七六五一（営業）

二九四一六七一一（編集）

振替口座東京六一四二二三

郵便番号一〇一一九一

印制 厚德社
製本 矢嶋製本

©1982 Tohru Kimura

Printed in Japan 0095-85187-4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが、小社読者係あてにご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

横浜事件の真相□つくられた「泊会議」もくじ

	はじめに――横浜事件と泊会議……………	1
1	入社後初の出版企画『支那問題辞典』……………	5
2	細川嘉六と尾崎秀実……………	8
3	細川さんのカッパの絵……………	12
4	泊旅行と細川さんの検挙……………	15
5	検挙の朝……………	19
6	特高（秘密警察）のかくし芸……………	21
7	でっち上げは拷問から……………	23
8	牢名主の看護で命びろい……………	25
9	見てしまった青写真……………	28
10	戦後の相川君の告発文……………	30
11	マークされていた細川論文……………	34
12	一枚のスナップ写真……………	37
13	新井義夫君と浅石晴世君の検挙……………	39

14	作らされた相川君の手記……………	42
15	「虚偽の自白」による捏造劇……………	45
16	太陽光線に憧れた留置場暮らし……………	48
17	特高に食いちらされた差入れ弁当……………	50
18	下司の勘ぐり……………	53
19	ぼくの一等兵物語……………	57
20	泊町まで調べに来た特高たち……………	64
21	驚かされた同僚の手紙……………	65
22	当人の意志を無視して書かされる手記……………	69
23	ワナとは知らずに書かされた特別手記……………	72
24	ぼくの「特別手記」……………	74
25	「下肚に力を入れよ、暴言を吐くな」……………	82
26	獄中の「申し合わせ」……………	85
27	細川さんを分離した法廷戦術……………	88
28	反撃を開始する……………	94
29	降伏放送直後の細川レポート……………	96
30	獄舎で飲んだビールの味……………	98
31	敗戦直後の裁判所側のうろたえさま……………	101

32	戦慄すべき極秘通達	104
33	細川嘉六獄中訓のこと	107
34	細川さんの政治学研究の到達点	113
35	事件のでっち上げは誰の謀略か	116
36	目撃者土井看守の話	118
37	出獄直後の体調を整える	121
38	ぼた餅のたべ方を知らない日本人	123
39	栄養補給のために米沢への旅	127
40	笹下会の結成と共同告発	130
41	共同告発は「事実による人権宣言」	132
42	特赦によって裏切られた共同告発の成果	137

あとがき	145
------	-----

資料

1	手記 相川博	149
2	細川嘉六・相川博予審終結決定	172
3	特別公務員暴行・傷害事件告訴状	182

はじめに——横浜事件と泊会議

さきの太平洋戦争下に起こされたいわゆる「横浜事件」とはどんな事件であったのか、ということについてはすでに事件関係者の著書やその他かなり多くの関連記事が書かれており、御存じの人も多いと思う。しかし、その横浜事件の発火点にされた「泊事件」というのがどんな事件で、どんな風に横浜事件につながり、ひろがっていったか、を正確に書いたものはまだ殆んどないといってもよいだろう。

何よりもまず、いわゆる泊事件の発端とはいったいどうしてひき起こされたのか。

そのひとつは、太平洋戦争開戦の翌昭和十七年（一九四二年）八月号・九月号の、総合雑誌『改造』に掲載された細川嘉六の論文「世界史の動向と日本」が大本営報道部によって摘発され、発禁にされたことから始まった。それは戦時下の言論弾圧事件としてよく知られているが、細川さんのその論文が大本営報道部によってどのように問題にされて「事件」にされていったのか、当時の軍当局が最初にそれを事件に仕立ててゆくいきさつから述べることにしよう。

昭和十七年九月七日、麴町の宝亭で開かれた六日会（軍報道部主催の雑誌懇談会）の席上で、陸軍報道部の平櫛孝少佐は、出席していた『改造』編集長の大森直道氏や同改造社の編集局長佐藤清氏、『中央公論』編集部黒田秀俊氏らに対してこう語ったのである。

「自分はなんの気なしに、寝ころんだままこの論文（『世界史の動向と日本』）を読みはじめ、途中思わず卒然として起き上った。筆者の述べるところは、わが南方民族政策において、ソ連に学べと

いうことに尽きる。南方現地において、日本民族が原住民と平等の立場で提携せよというのは民族自決主義であり、敗戦主義である。しかもそのままではめよとするもの以外の何ものでもない。かくてこの論文は日本の指導的立場を全面的に否定する反戦主義の鼓吹であり、戦時下巧妙なる共産主義の煽動である。一読驚嘆した自分は、早速このことを谷萩報道部長に報告すると同時に専門家にも論文を審議させたところ、自分と全く同じ結論をえた。」

これに続いて同年（昭和十七年）九月十四日号『日本読書新聞』（大日本出版文化協会機関紙）に谷萩那雄陸軍報道部長は「戦争と読書」と題して長文の談話を発表した。その中で谷萩は、特に戦時下の検閲の重要性に言及して、『改造』誌上の細川論文は戦時下巧妙な共産主義の宣伝である、これを見逃したのは検閲の手ぬかりだ、ときめつけたのである。

こうなると、警視庁でも放つてはおかれない。細川さんは昭和十七年九月十四日東京世田谷署に検挙、勾留される身となった。

ところが、泊事件にはもうひとつまったく別の発端があつたのである。それは川田寿・川田定子夫妻が同じ年の昭和十七年九月十一日に横浜加賀町署に検挙された事件で、「アメリカ共産党員事件」と呼ばれたが、その事件は川田夫妻の逮捕を契機として、川田寿氏の勤務先の世界経済調査会が組織していたソ連事情調査班関係者もそれに続いて検挙された。そして、高橋善雄、益田直彦、関口元の諸氏とともに満鉄調査部の平館利雄、西沢富夫の両君がその関係者として昭和十八年（一九四三年）五月十一日、横浜署に検挙される破目になった。これが「世界経済調査会ソ連事情調査班事件」と呼ばれるものである。

満鉄調査部に勤務していた平館、西沢両君は同じ満鉄調査部の嘱託だった細川さんとはじつこの間柄であった。その平館君の押収品の中からたまたま細川さんと一緒に泊旅行をした時の数枚のスナップ写真が発見された。それは前年(昭和十七年Ⅱ一九四二年)七月初めに、細川さんが七名の者を自分の郷里の富山県朝日町泊へ招待して清遊した際に、同行の同じ満鉄調査部員の西尾忠四郎君が即興的に自分のカメラで撮った一連の旅のスナップ写真であった。特高はその中の一枚の記念写真を強引にも、細川氏を中心とした「共産党再建準備泊会議」の証拠物件に擬したのである。その七名とは満鉄調査部員・平館利雄、同・西沢富夫、同・西尾忠四郎、改造社員・相川博、同・小野康人、東洋経済新報社員・加藤政治、中央公論社員・木村亨、であった。

泊事件というのは、細川さんの論文「世界史の動向と日本」が軍報道部によって摘発され、東京において細川さんが特高警察の追及を受けた言論弾圧の一件とはまったく別の事件であり、横浜署に検挙された別件の満鉄調査部員の所持品から発見された右の一枚の写真をもとに神奈川県特高が仕組んだものであった。

しかも、細川さんの論文事件は東京では治安維持法違反の容疑も明確にされず、三十三回に及んだ訊問の末に、起訴もされないで釈放されようとしていた。その矢先、細川さんは昭和十九年(一九四四年)五月末に東京から横浜へいわゆる別件逮捕というかたちで身柄を移監されたのであった。

あの一枚の写真が、前述のように全く違う二つの別々の事件をひとつのいわゆる「泊事件」にドッキングさせる媒介体になった、と言ってもよいだろう。

ところで、この泊事件はあとで細川さん自身が説明しているように、細川さんの愛称「カッパ(河童)

さん」の名にちなんで「カップ事件」とも呼ばれるが、泊事件に連座したぼくたち各自の職場関係から、特高秘密警察は次々に治安維持法違反容疑の口実を設けては検挙者の数をひろげていった。それは、前述の「アメリカ共産党員事件」を発端に、「世界経済調査会」「ソ連事情調査班事件」へと続き、そこから泊会議の「泊事件」（党再建準備会事件）、別称「カップ事件」、さらに満鉄調査部、中央公論社、改造社、日本評論社、岩波書店、朝日新聞社、そして政治経済研究会（昭和塾関係）、愛国政治同志会、日本編集者会、同人雑誌『五月』等々の関係者たち六十余名の検挙へと拡大されていったもので、それが世にいわゆる「横浜事件」と呼ばれるものである。

こうしてひろがっていった横浜事件の核とさえいえる「泊事件」の真相を明らかにするためには、事件当事者にさえも謎のままに残された側面がその裏に横たわっていたのである。そこで、ぼくはこの「泊事件」に連座させられた者の一人として、ぼくの体験を踏まえながら、いまだにぼく自身も謎に思われるいくつかの不明な点を追究して、ぼくなりにその真相に迫ってみたいと思う。

1 入社後初の出版企画『支那問題辞典』

ぼく自身が当時この「カップ事件」の人たちとどんなふうにかかわっていたのか、カップさんこと細川さんとはどんな人物でどんな思想家だったのか、またぼくがなぜこの事件に連座させられたのか、といういきさつをまず最初に誌しておくのが順序であろう。

ぼくの手許に、古びた当時のメモのたぐいがいくつに残っている。すり切れたノートのそこそこには、ぼくがどんな気持ちや考えで仕事をしていたか、職場の同僚たちや、執筆者たちとの接触ぶりや時代のきびしい風向きまで、その時折の気分にかかせてアト・ランダムに書きつけてある。もちろん日記ではないから日付を追って書きこんだものではないので、何年何月何日に何がどうした、とはなっていない。しかし、こんなメモ・ノートでも、事件のときに押収されなくて残っていたおかげで、いまになると昔のことを想起するのにはいくらか役には立つのである。（なぜこんなメモ・ノートが押収をまぬがれて助かったかについてはあとで述べる。）

まずぼくがどのようにして細川さんとめぐり会うことになったのか。つまりぼくが中央公論社へ入社して、出版企画『支那問題辞典』を初企画として提案し、決定するまでの経緯をかいつまんで書いておきたい。

ぼくが中央公論社の「新進気鋭の編集者を募る」という社員募集の入社試験に応じたのは昭和十三年秋のことであった。正直言ってぼくには別にごこでなければ、といった志望の雑誌社があったわけでは

ない。むしろ、次第にミリタリズムとファシズム化が強まってゆく社会風潮に対して、ぼくなりの逃避行を考えていた、といったほうが当たっている。

事実、そのころぼくは渡米を夢みていたのである。知人の朝比奈二郎氏がサンフランシスコで日系米人のための邦字新聞を発行していたので、なんとかして日本を脱出してその新聞社の仕事を手伝えないものか、と案じていたのである。ところがいざ渡米となると、渡航手続きが必要なのはいうまでもあるまい。そこで、所管の役所である外務省の窓口へ問い合わせに行ったところ、「徴兵前の海外渡航は許されない」という返事で、雄図空しくぼくの渡米計画は断念せざるをえないことになってしまった。

そんなある日、御無沙汰していた早大文学部の建物へ入ってゆくと、玄関先の眼前の掲示板に、「新進気鋭の編集者を求む」の社員募集公告が貼り出されているのに出くわしたのであった。早速、志望理由書を書いて丸ビル五階の中央公論社の受付へ持参すると、数日後に「13番」なる受験番号と入社試験日の通知を受け取った。その試験に何百人の応募者がいたのか、試験場がどこだったのか、もう覚えていないが、翌年の一月半ばに同社から「入社決定通知」なる一枚の葉書を受け取った。そのときの入社決定者は四名で、中には杉森久英さんも入っていた。

ぼくは後日の参考のために、その折に提出した「志望理由書」を入社早々に返却してもらっていたので、今でもまだそれが手許に残っているが、読みかえすと恥ずかしいほど気負った幼稚な文章である。ただひとつ、どうしたことか、中央公論社を受けたのは中央公論社がデモクラシー紹介の歴史と伝統をもっているがゆえに、と書いているのは、当時の時代風潮を思えば大胆不敵な表現であったとわれながらひやりとする。当時の社長嶋中雄作氏もそんな人間をよくも採用したものだと思う。

実際のぼくの入社は昭和十四年三月末であった。入社当初の半年間は見習社員ということで、校閲部へあずけられて「校正」のイロハから習わせられた。ぼくはその校正が一人前にできなくて、初めからの落第生だった。十月だったか、半年間の見習期間を終えて今度は正式に出版部へ配属されることになった。

ぼくが出版部員として初めて自分で作った出版企画『支那問題辞典』案を出版準備委員会へ提案したのは、昭和十五年二月七日のことである。そのころのメモ・ノートを開けてみると、二月七日のところにこう誌している。そのまま引用してみよう。

「出版準備委員会へ例の『支那問題辞典』企画草案を提出したら、議論ふつとうして決定は協議会に廻わされることになった。

反対者は篠原、佐藤、杉森、相沢、松田氏らで、支持賛成者は堺、青木、平、橋本、黒田、水藤、沢の諸氏。

会の様子を詳しく書けば面白いのだが、私自身の提案説明が失敗であったことを認める。もっと正確に解説し、説得すべきであった。説得力が足りないのだ。云々。」

こうした協議を重ねて『支那問題辞典』は刊行されることに決まった。

ついでのことに、ぼくがこの『支那問題辞典』なるものを出版企画として思い立ったわけも述べておきたい。それは、ぼくが学生時代に神田の古本屋から購入した『支那問題講話』という一冊の古本からの発想だったのである。一九三〇年七月にプロレタリア科学研究所が編集し発行して、鉄塔書院から発売されたその本は佐藤一郎、藤枝丈夫、岩村三千夫（ペンネーム中山耕太郎）の諸氏が各自の中国革命論

と中国問題に関する研究成果を執筆したもので、中国革命のいわれを研究していたべくにとつては貴重な参考書であり、なんとかしてそうした真面目な中国問題の研究成果を集大成して世の識者たちの参考に供したいと考えていたのであった。たまたまぼくはそのとき出版部に職場を得たので、ちょうどその本の発刊十年目に、ぼくなりの『支那問題辞典』企画草案を練り上げようと思ひ立つたのである。もちろん専門家ではないべくに詳しい内容構成まで考え出せるわけではない。そこで、学生時代の友人で津田左右吉先生の愛弟子とされていた藤井正夫さんを誘って、この辞典の内容構成についてその協力を得たのであった。

2 細川嘉六と尾崎秀実

いよいよ正式に『支那問題辞典』の刊行が決まり、およその内容構成が整ったので、この辞典編集の総監修を誰にするかということになった。当時中国問題の権威とされていたのは、橘樸^{たちばな しらき}、平野義太郎、尾崎秀実^{はらみ}、細川嘉六等の諸氏で、いずれもなかなかの論客であった。

中央公論社では一年先輩に当る青木滋^{あおき しげ}（青地晨君がぼくのこのプランにたいへん賛成で、前記の提案の際も熱心に支持してくれた一人であったが、正式に刊行と決まったとき、その青木君が「監修は細川さんに頼んだらどうかね」と、早速ぼくを世田谷の細川さんの家へ連れていって、紹介してくれたのであった。

この出版企画を聞いた初対面の細川さんは、大いに意義のある出版計画だからしつかりやりたまえ、

とぼくに励ましの言葉をかけてくれたことを忘れない。ぼくはその言葉に気をよくして本格的にこの辞典の編集に取りかかった。

それにしても戦時とはひどいものである。とりわけ昭和十六年十二月八日前後の内外の情勢のきびしさは戦後の人びとの想像を超えたものがあり、いわゆる総合雑誌社の社内の様子もただならぬ気配に包まれていた。出版部の片隅のデスクに座っていたぼくは、自分が出版部員として初めての出版企画であった『支那問題辞典』の最後の仕上げに取り組んでいた。いま述べたようにこの辞典では細川さんに顧問役をお願いしていたが、細川さんの紹介で、実際に編集の段階からぼくの相談相手をしていてくれたのがほかならぬ尾崎秀実氏であった。辞典全体の構成から項目の選択、執筆者の選定指名と原稿執筆の依頼など、細部にいたるまで尾崎氏はよくぼくの相談に乗ってくれて、少なくとも二週間に一度はそのころいつも用いた銀座七丁目うらの中華料理店で打ち合せを行なったものである。尾崎氏は持ち前のふくよかな笑顔でその店へ定刻に現われては食事をともにして、ぼくの辞典の進行状況の報告を聞いて、彼のこの辞典についての思いつきや意見を率直に述べるのであった。

そのころぼくは中国共産党の戦力と勢力の驚くべき強さの実態と近況をこの辞典で世に紹介したいと念願していた。それには尾崎氏からのホット・ニュースはじつに貴重なものであった。

ところが、昭和十六年十二月の真珠湾攻撃の約二カ月前の十月十五日に、その尾崎秀実氏が突如姿を消してしまった。聞けば、ちよつと厄介な事件にまき込まれたためだという。あとでわかったことだが、それは昭和十六年（一九四一年）秋に駐日ドイツ大使館顧問リヒアルト・ゾルゲや満鉄嘱託尾崎秀実らを中心とした反戦スパイ事件、あのゾルゲ事件のことであった。

『支那問題辞典』はその年十二月には校了になって装幀などをどうするか、いよいよ編集の最終段階にさしかかっていた。辞典編集部では、尾崎氏をこの辞典の顧問として他の顧問たちとともにその名を残しておくか、それともうるさい当局の検閲を考慮して顧問名からはずすか、また尾崎氏が執筆した「支那事変」ほか二、三の項目も他の誰かに執筆者名を変えるかどうか、などについて細川さんや他の顧問の意見も聞いて急遽打ち合せた結果、当時直接責任者であった藤田親昌出版部長の判断で、尾崎氏の名は顧問からはずすこと、また尾崎氏の執筆項目については顧問のひとりであった橘樸氏の申し出によって尾崎氏の名を橘氏の名に替えて刊行すること、などに決定して、それぞれの処置を終え、どうにか本辞典を刊行できたのは昭和十七年三月末のことであった。

出版部員としての当時のぼくの仕事ぶりといえば、正直言ってまともなものではなかった。出版企画を考える社業にかこつけては、当時の風潮に背を向けていた京都の末川博、恒藤恭、名和統一、中井正一、真下信一らの諸氏を訪ねたり、東京では豊島区に住んでいた秋田雨雀老や世田谷の郊外にわび住いをしていた石川三四郎老をはじめ、駒場の山田勝次郎氏や中野重治氏、宮本百合子さんなどを訪ねて歩く風来坊ぐらしの毎日であった。たまたま例の『支那問題辞典』の編集に取りかかり、細川さんや尾崎秀実氏に会わねばならなくなったので、虎の門の南満洲鉄道東京支社調査部の嘱託室へ立ち寄ることが多くなった。そしてその満鉄支社の調査部で、細川さんから初めて平館利雄、西尾忠四郎、西沢富夫の諸君を紹介されて知り合った、というわけであった。

昭和十六年十二月九日、つまり日本海軍の真珠湾奇襲攻撃の翌日である。ぼくはその前日のショックさめやらず、ついまた虎の門の満鉄東京支社のほうへ足が向いてしまった。いつもの調査部の控えの応

接間に入って西尾君らと雑談していると、午後二時ごろであつたろうか、期せずして細川さんが現われ、つづいて改造社の相川博君や東洋経済新報社の加藤政治君もやって来た。西尾君の耳うちで初めて知つたことだつたが、昨日の真珠湾奇襲攻撃と同時に、治安維持法の改悪による「予防拘禁法」によって、非合法共產党時代の闘士であつた服部麦生君らがまたぞろ予防拘禁され、拘留所送りになつたという。これはうかうかしてはおれないぞ、という不気味な予感がしたことは否定できない事実であつた。

満鉄東京支社の応接間であつたか、それとも席を社員食堂へ移してからであつたか、場所は定かでないが、そのとき細川さんが、ぼくらに初めて覚悟のほどを語つたのである。細川さんとしてはいづく鋭いまなざしをキラリと光らせて、大真面目にぼくらをひとりひとり見まわしながら、いつものように低いバスで言つた。

「この情勢ではもはやどんなことが起きるか知れたものではない。何が起きようとも驚いてはいけな^はい。わしはどうしても日本のこの行き方を黙認できない。肚を決めて書くことにする。諸君の協力を願ひたいがたとえばどんなはずみで捕われの身になるとしても決して何ごともしゃべつてはならない。」

細川さんはここでご自分の右手の人指しゆびを口もとへたてにあてがって、きりつと口を結んでみせた。もとより何も隠しごとなどがあつたわけではない。

その日の夕方はみんな新橋駅近くの居酒屋で一杯やつて別れた。しかし細川さんとのそのときの申し合せはついにその場だけのものになつてしまつたのであつた。まったく情けないことだが、いざ権力の前に立つたとき、ひとはどんなに弱いものか、ぼくは「泊事件」に連座して、身をもつて思い知らされた気がする。